

■ 十和田中央病院

十和田市立中央病院でメンタルヘルス科(旧精神神経科)の患者数が伸びている。1日平均の外來患者数は、医師が1人だった2008年度が40人、医師が1人増え2人となった09年度は49人、さらに医師1人が加わり3人体制の10年度は68人になり、11年度も増加傾向は続く。医師数の増加が、潜在的な地域のニーズの掘り起こしに結びついた結果といえる。

同科は10年10月から、自力で外出困難な患者の自宅に医師が出向く訪問診療を始めた。県内の総合病院では初の試みという。また、軽度の患者にも幅広く受診してもらおう狙いで、同年11月に従来の「精神神経科」から現在の「メンタルヘルス科」に改称した。これらが直接、患者増に結びついたか

時 評

どうかは明確でないものの、患者に寄り添った医療を提供しようという姿勢は評価したい。

一般的に自殺の要因として、うつ病など精神疾患との関連性が指摘されるが、治療を受けていない人はまだまだ多い。また、全国平均に比べ自殺率が高い青森県でも

こうした状況を踏まえると、同病院のメンタルヘルス科の存在意義は決して小さくない。

同科をめぐっては昨年後半から一時、入院病床の削減や診療科自体の廃止などが取り沙汰された。精神科の診療単価が、他の診療科に比べて低いことが背景にあった

自殺対策に増す存在意義

特に、上十三地域は自殺者が多いといわれる。

自殺対策の一環として県は11年度、精神科と民間病院の内科などが情報共有し、連携強化を図るための新規事業を予定しており、上十三地域では十和田中央病院に中核的な役割が求められるだろう。

一方で、個別外部監査では「毎年、1億円近い赤字を計上している」と批判された。

これに対し同病院は、市からの繰入金が多くは総務省の基準に基づき国からの交付税でまかなわれており、実質的に大きな損失は出ていないと強調。また、同市の

精神科の医療機関は主に、急性期の患者は同病院、慢性期は民間の2病院と役割を分担しており、蘆野吉和管理者は今年に入って「急性期の患者に対応するため必要」と、同科の存続を決めた経緯がある。

今年2月に開かれた外部識者による経営評価委員会では、全国的に医師不足の状態が続く中、同病院に精神科医が3人いることを高く評価する声が相次いだ。同科の医師によると、患者増ながら現状では大幅な赤字には至っていないという。とはいえ、地域に必要な医療を提供するのは自治体病院の使命。収支をにらみながらの難しい経営が続くことになるが、業務改善に不断の努力を注ぎ、地域の期待に添えてほしい。